14 看護師との協働による要介護・要支援者に対する療養支援ネットワーク構築

研究分担者　三嶋 一輝
国立大学法人福井大学病院部医療支援課 総括医療ソーシャルワーカー

研究要旨

HIV感染症患者の長期療養を支えるため、全国のエイズ治療拠点病院は地域連携を推進しており、HIV診療チームの看護師、医療ソーシャルワーカー（以下MSWとする）には、地域や関係機関との連携力が求められている。地域連携には職種連携が不可欠であり、看護師とMSWの役割分担や協働などの実際を把握し、課題を整理することを目的に「HIV感染症患者を支える地方エイズ治療拠点病院における連携活動の実際」をテーマとして第2回協働シンポジウムをオンラインで実施した。
前年度の第１回シンポジウム（研究分担者：葛田衣重、2021年12月15日開催、WEB）は首都圏の拠点病院からの活動報告であったが、今年度は地方の拠点病院（1施設あたりの症例が30例程度の中核拠点病院、ブロック拠点病院）の看護師とMSWの協働の報告をもとに今後のHIVケア支援を考えることをねらいとした。
今回は地方をテーマにしたが、全国から243名が参加し、テーマへの関心の高さが明らかとなった。オンラインの利便性、時間の適切さも参加し易さにつながった。参加した両職種は協働の重要性を理解し実践しており、直面している課題や予測される課題解決のために、他院看護師とMSWの協働の取り組みを学ぶ、自院の協働体制構築のために情報収集する、などの意図があると考えられた。今後は協働を前提とした課題別、職種別など研修プログラムの検討、中核拠点病院のMSWを中心とした会議・研修会による全国の療養支援体制の均てん化が必要である。

A. 研究目的

HIV感染症は治療の進歩により長期療養時代を迎えている。患者からはHIV 関連・非HIV 関連疾患の治療や予防、加齢に伴う心身の機能低下など医療介護や、住まいのことや終活などの福祉相談を受ける機会が増加している。この相談の主な窓口となり、適切な支援担当者・機関に繋ぐ、または支援しているのは、全国のエイズ治療拠点病院の看護師やMSWである。エイズ治療拠点病院は、整備の目的と歴史的背景から、その地域医療の中核を担う医療機関に等しい。したがって所属する看護師とMSWは、HIVを含む多様な疾患と生活課題の支援を尊重し地域の社会資源を把握・開拓しながら実践している。

エイズ予防指針には、「地域の感染者等の数及び医療資源の状況に応じ、エイズ治療拠点病院を中心とする 包括的な診療体制を構築するためには、専門的医療と地域における保健医療サービス及び介護・福祉サービスとの連携等が必要であることから、国及び都道府県等は、地方ブロック拠点病院及び中核拠点病院に、HIV感染症・エイズに関して知見を有する看護師、MSW等を配置し、各種保健医療サービス及び介護・福祉サービスとの連携を確保するための機能（以下「コーディネーション」という。）を拡充することが重要である」とあり、看護師とMSWの配置と連携力の重要性が明記されている。さらにHIV診療ではチーム医療が推奨され、診療報酬上に加算対象として位置づいている。

しかし看護師とMSW相互の協働については触れられていない。

そこで、本研究では、要介護・要支援者に対する

療養支援のネットワーク構築を担う看護師とMSWの連携・協働について、今回は特に地方エイズ治療拠点病院の現状を把握し課題を整理することを目的とした。事後アンケート結果でシンポジウムの評価をし、今後の協働について検討した。

B. 研究方法

(1) 対象：全国のエイズ治療拠点病院の看護師とMSW。

(2) 方法：「HIV感染症患者を支える地方エイズ治療拠点病院における連携活動の実際」をテーマに、オンライン形式のシンポジウム、総合討論を実施した（案内チラシ）。

申込時に、事前アンケートとして「総合討論で聞いてみたいこと」「今後テーマとして取り上げてほしいこと」を自由記載で設定した。事後アンケートでは、参加者の属性、参加回数、HIV感染症患者の支援経験、シンポジウムの評価、自由記載には「感想、意見」「今後の企画希望」などを項目として設定した。

申込みは先着制100名、インターネット、QRコードで受付した。案内チラシを全国拠点病院に送付し、締め切りはシンポジウム実施の1週間前までとした。

シンポジウム案内チラシ

C. 研究結果

1. シンポジウムの参加

申込者は268名あり、243名が参加した。事前質問は15名から自由記載が寄せられた。全国から約240名が参加できたのは、オンライン形式の利点と考えられた。

2. 事前質問の内容

シンポジウム申し込み時、事前アンケートに、「総合討論で聞いてみたい内容」を自由記載として設けた。

その結果、15名から質問が得られた。内容は看護師とMSWの協働に関するものと、直接支援に関するものに大別された。

○ 看護師とMSWの協働に関すること

- お互いうまく連携を取れるよう、連携する内容やどのような流れで対応しているか
- 多職種と情報共有する上で重要視していること
- コロナのなかで、コミュニケーションはどのようにしていたか

○直接の支援に関すること

- 地域連携・・・出前講座等のアプローチの仕方、地域による診療や支援の特色・困難なこと、保健所との連携の中での医療機関からの要望
- 高齢化・・・施設調整、在宅支援
- 告知・・・告知直後の方に対する対応

事前質問の内容からシンポジウムのテーマに沿った質問を優先して複数取り上げ、シンポジスト及び参加者から指定発言者を選定した。重要かつ取り上げ切れなかった質問は、シンポジウム報告書にQ&Aとして掲載した。報告書はフライヤーを配布した全国拠点病院および送付を希望した参加者に配布することとした。

① 総合討論で取り上げた質問

- 看護師とMSWの連携する内容と流れ
- コロナの中での両者のコミュニケーション
- 地域との連携のコツについて
- 困難だった地域支援例

② Q&Aに納めた質問

- 終活の具体的な取り組み、内容
- 行政と連携した療養支援
- 地域施設、訪問看護、訪問診療などの受け入れ拡大の取り組み

3. シンポジウム参加状況から～事後アンケート結果から～

参加者243名のうち41.9%にあたる102名から回答が得られた。

(1) 参加回数、勤務地、所属、職種（図１）

参加回数は、「はじめて参加した」が64.7%、「2回目（第１回に参加した）」が34.3%だった。勤務地は、「関東・甲信越」23.5%、「近畿」18.6%、「北陸」12.7%、「中国・四国」11.8%だった。第１回シンポジウムに比べ、「関東・甲信越」の割合が減り、全国各地から均等な参加割合となった。所属は医療機関が92.2%であり、職種は看護師とMSWほぼ半数ずつを占めた。

(2) HIV感染症患者の支援経験、経験数、支援の時期（図２）

HIV感染症患者の支援経験は「あり」が82.4%、「なし」が17.6%だった。拠点病院であっても、支援経験のない看護師またはMSWが存在した。支援経験「あり」と答えた者の支援数は「10例以上」が46.1%と最も多く、次いで「1例」27.5%、「2－4例」13.7%、「5－10例」12.7%であった。今回、地方拠点病院を対象としたため、首都圏を対象とした前回よりも「1例」の割合が多かった。支援の時期は、「現在対応中」が53.9%と最も多かった。次いで、「3年以上前」27.5%、「1年以内」12.7%であった。

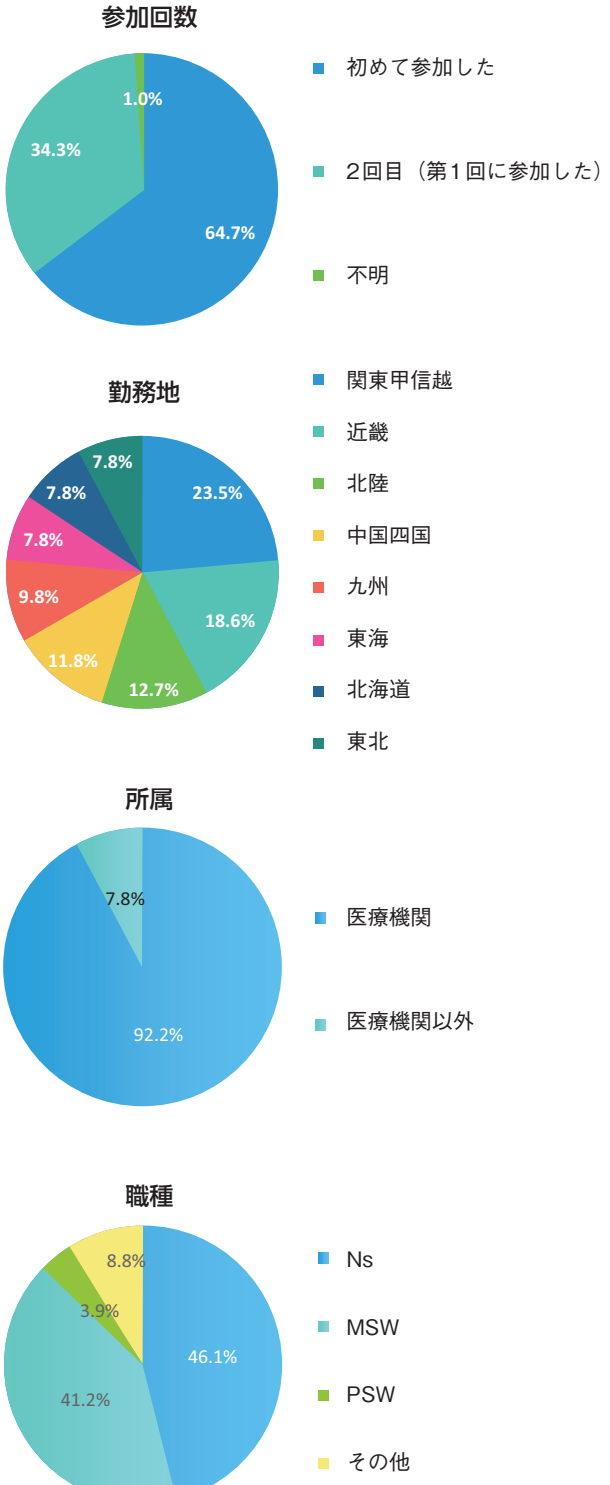

図１　参加回数、参加者の勤務先、所属、職種（%）N=102

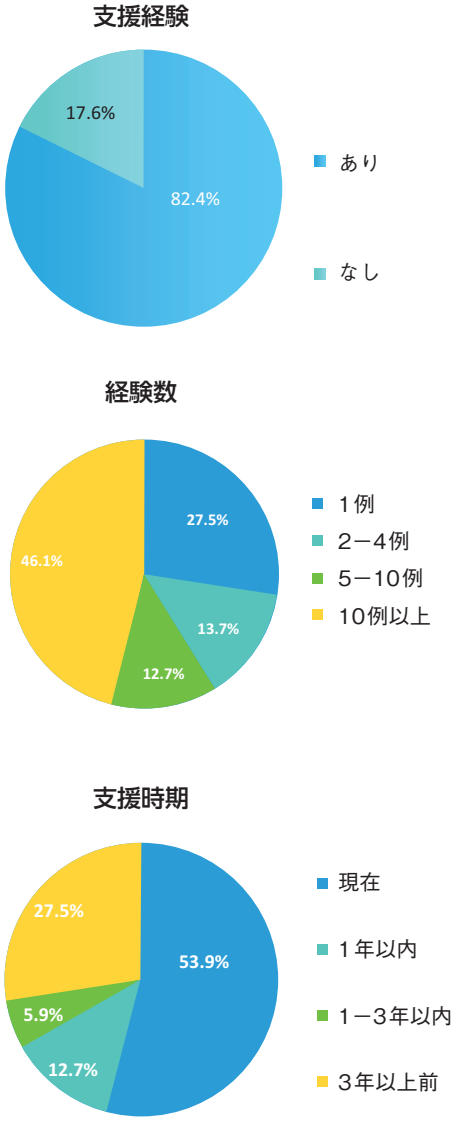

図２　支援経験、経験数、支援の時期（%）N=102

(3) シンポジウムの評価（図3）

テーマ、講義内容、総合討論、WEB形式のすべての項目で「大変良かった」または「良かった」との評価であった。第1回シンポジウムでは、事例（15分×2回）、総合討論（3題）とタイトスケジュールであったため、第2回は、事例（12分×2回）、総合討論（2題）とするなど時間配分を工夫した結果であると考える。シンポジウムの時間は、平日夕方18：00～19：10の70分を設定した。「丁度良い」85.3%、「長い」9.8%、「短い」4.9%であった。時間の長さ及び時間帯は概ね適切であった。

(4) 参加動機（図4）

参加動機は「関心あるテーマだったから」が最も多く43.4%、次いで「HIV感染症患者を担当しているから」が34.6%、「職場・関係者から勧められたから」が15.7%であった。看護師とMSWの連携に関心があり、連携について学びたいという意思があることが分かった。

(5) 今後の参加希望（図5）

本シンポジウムへの今後の参加希望は「参加したい」100%だった。本テーマへの関心が高く、満足度も高い結果となった。第1回に引き続き、事前アンケート、事後アンケートを分析し、適切なテーマを選定してHIV感染症患者の支援体制を学び、考える機会を提供する必要があると考えられた。

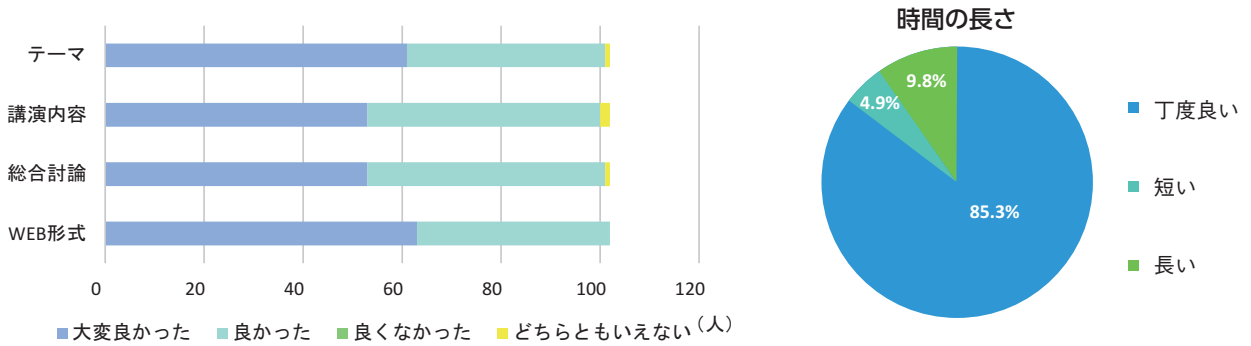

図3　シンポジウムの評価　N=102

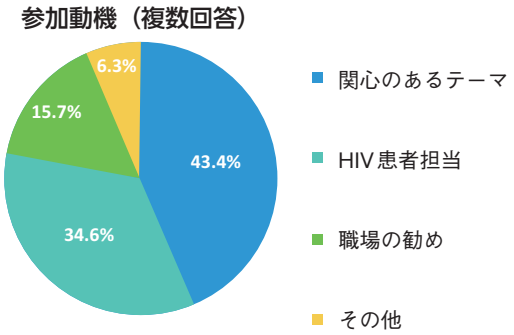

図4　参加動機（複数回答）

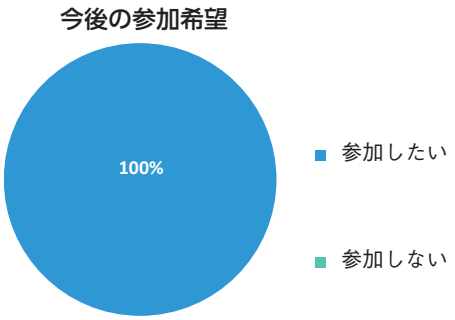

図5　今後の参加希望　N=102

4. 今後に向けて～事後アンケート自由記載から～

(1) 自由記載は参加者の 37 名（事後アンケート回答者の 37.0%）から得られた。

(2) 記載者の勤務地と職種（図 6）

勤務地は「関東甲信越」が 22.9%、次いで「近畿」22.9%、「東北」14.3%、「北陸」「中国四国」がそれぞれ 11.4%、「九州」8.6%であった。記載者の職種は、MSW（精神科ソーシャルワーカー含む）が 48.6%、看護師が 37.1%と MSWが看護師を上回った。

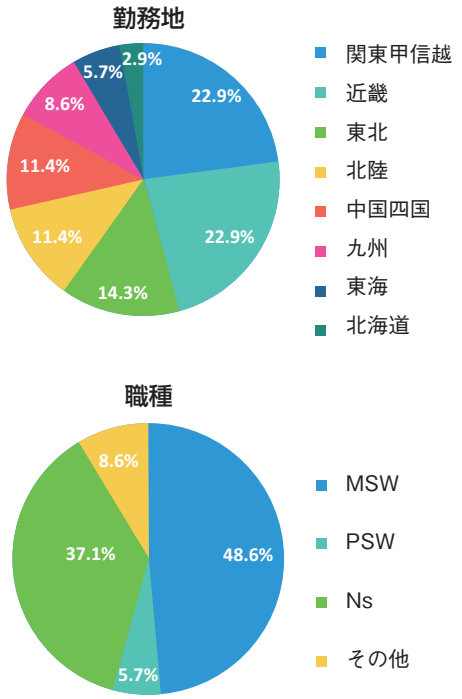

図６　自由記載者の勤務地と職種（%）N=35

(3) 自由記載から

① 意見・感想

「地域の取り組みということで身近に感じました。」「地域の実情が分かった。」「首都圏以外でのお話が聞けてとてもよかったです。」などの意見が多数みられ、前回シンポジウムとは違った角度から看護師と MSWの協働を学ぶ機会となったことが明らかとなった。

- 「都市部の拠点病院で勤務しているため、地方ならではの困難やそれに対する取り組みなどを知ることができ、とても勉強になりました。どこにいても安心して医療が受けられる体制を作るために何ができるのかを考え続けていきたいです。」（近畿　MSW）
- 「職場内での多職種の協働ができると、他機関との連携においても役割が互いに理解できてスムーズに支援が進みやすいと感じました。ありがとうございました。」（中国四国　MSW）
- 「全国から参加されることが強みだと感じましたので、今回の転居に関する討論のように都道府県をまたいだ支援、引継ぎの方法について困り感や要望を共有できたらいいなと思いました。」（東北　MSW）
- 「貴重な内容が聞けて良かったです。実際に支援経験はありませんが、支援する際には今回のシンポジュウムを参考にしたいと思います。」（東北　MSW）
- 「首都圏以外でのお話が聞けてとてもよかったです。」（関東甲信越　Ns）
- 「看護師と MSWとの協働について、まずはお互いの役割を知ることと日ごろからのコミュニケーションが大切であると思いました。忙しいときでも、協力するというマインドも大事ですよね。ありがとうございました。」（近畿　看護師）
- 「HIV 研修を受け、今回興味をもって参加しましたが、普段からあまり HIV 患者とのかかわりがなく、積極的に意見交換には参加できませんでした。しかし、いろいろな地域の事情やかかわり方を知り、今後のその機会に生かせればと思いました。参考になりました。」（九州　看護師）
- 「MSWとの協働が患者への安心感につながると感じた。」（東北　看護師）

その一方で、地域連携の基盤となる院内連携や院内のチーム作りの重要性は理解しつつも、日々の業務との兼ね合いやソーシャルワークの専門性に課題が残る組織があることも明らかとなった。

- 「とても面白いテーマでした。Ns と MSW、それぞれの立場からみた相手の職種のことを聞くことができてよかったです。「相手のことを知る」「相手の話をよく聞く」というのは協働の基本だと思います。日頃からのコミュニケーションが大切なのは本当によくわかります。しかし業務が増えて余裕がなくきつく言われることもあります。連携・協働するために、もっとわかりやすいルールを一緒に作れたらいいなと思います（わかっていてもなかなかできないので）。」（中国四国　MSW）
- 「治療の向上により長期療養支援に重きが置かれるようになっているにもかかわらず、医師・看護師主体の医療モデルでの支援が続いている現状、受講前に想像していた以上に院内での多職種連携にも様々な困難を抱えている初期段階にある

ことがわかった。本来であれば、医師・看護師がアセスメント→必要時にSWにオーダー、という流れではなく、それぞれの職種がそれぞれの専門性、視点からのアセスメントを並行して進めながら、複層的に関わり続けることが必要なのではないかと思う。そうした意味において、特にSWはソーシャルワークの専門性とは何か、という原点に立ち返り、自分たちがチームの中で何ができるか、なにをすべきか、現在の在り方で本当に良いのか、という問いに向き合い、実践していく必要がある。」（北陸　PSW）

地方拠点病院のMSWと看護師は、年に数例～数十例の患者を対象に支援を行っている。通常は、がんや難病、循環器疾患など他疾患の入退院支援や患者相談を主な業務としている。当然ながらHIV以外の業務割合が圧倒的に多い。そのような中で、両者は時間を工面しながら患者支援を行っており、コミュニケーションの取り方にも工夫が見える。今後は、症例は少ないが、HIV特有の課題の解決に求められる特殊性、専門性をいかに両者のコミュニケーションで解決できるか、役割分担のルール化や互いの専門性向上による協働のさらなる強化が求められる。

② 今後の企画に希望するテーマ

○ 課題や状況毎の支援事例（地域例、介入時期、高齢、外国人など）の共有と検討

- 「在宅支援や患者が抱える問題等の紹介があれば知りたい。」（東北　看護師）
- 「具体的なケースへの対応について紹介していただきたいと思いました。」（関東甲信越　MSW）
- 「生活モデルに立った支援のあり方について、他の慢性疾患, 精神疾患等、疾患と障害が併存している先行領域から学ぶ会。例えば総合討論にあった京都の取り組み等について詳しく知ることが、多職種・他機関、多様な立場の人たちとの連携のあり方について知り、理解していく上で、大いに役に立つのではないかと思う。」（北陸　PSW）

○ 地域連携の実際、受け入れた施設や受け入れを検討してくれる施設との協働

- 「HIV患者の介護の問題、入所支援について、介護サービスを提供している事業所目線のお話が聞きたいです。」（東北　MSW）

○ACPの取り組み

- 「HIV患者のACPについて」（九州　MSW）

○行政との連携

- 「行政との連携が、これからますます必要となってくると思いました。」（関東甲信越　MSW）
- 「HIV・エイズ患者への行政との連携の実際」（東北　その他）

○多職種連携について

- 「このテーマ続けてほしいです！多職種が連携・協働することが良いことばかりとは限らず、促進要因と阻害要因など知ってより良い連携・協働を目指したいです。」（中国四国　MSW）
- 「チーム医療の連携」（北陸　その他）

○ 正しい制度理解と社会資源の活用について

- 「高齢化、転居に伴う制度の諸手続きの煩雑さ、制度更新忘れによる適用不可事例に対して、既存の自立支援医療、障害者手帳の手続きの在り方」（関東甲信越　MSW）

そのほか、患者力向上のための支援など様々なテーマが挙げられた。

今回のシンポジウムに参加して、今後は地域の課題、行政との連携や個別事例の共有を希望する意見が多かった。

以上の結果は全参加者の一部であり、他の参加者の評価や感想が得られていないことが課題であるが、得られた意見をもとに今後の企画、運営を検討する必要がある。

D. 考察

1. 地方エイズ拠点病院の看護師とMSWの役割と協働

外来看護師は、看護師が患者からの相談窓口として機能し、相談や課題を整理しながら、医療継続を目標にMSWや心理士など必要な職種につなげている。そのために日頃からのコミュニケーションを心掛けることやMSWなど多職種の視点なども参考にして患者支援を行っている。一方、MSWは、病院内における「地域」の窓口で的確に「つなぐ」役割であることを意識している。社会生活全体に視野を向け、その人らしい生活が送れるよう自己決定を支援している。看護師は、「院内」の相談窓口としての機能があり、MSWは、「地域」の窓口として役割分担を行っている。この両者を中心としたHIVケアチームが個人の問題を組織や地域の課題として認識し、組織改善や地域開拓の役割を担っている。

2. 地方拠点病院の看護師とMSWの協働の実態

看護師は、看護師の見立てが不足していないか間違っていないか協働しながら、支援内容を適宜修正していた。MSWとの役割の違い、協働による振り返りを行っていた。地方拠点病院は、患者数は少ないものの、非HIV関連の疾患管理や高齢者の増加し

ており、全診療科対応や地域支援（ACPを含む）など、首都圏と同様の療養課題があり、多職種によるチームで対応していた。また、看護師が複数名体制で役割分担し、外来・入院で継続して対応できる体制をとっていた。一方、MSWは、看護師から医療的な知識の不足を補うことや、社会生活の視点を意識して情報提供・共有すること、関係性の維持に心がけていた。看護師と良好なコミュニケーションを維持できるようにし、的確に、確実につないでもらえる関係の構築を意識していた。

3．今後の事業

本研究で明らかとなったニーズに対応するために、今後の事業として以下を検討したい。

- 看護師とMSWの協働を前提とした『基礎研修プログラム』、『課題別研修プログラム』の開発と実施
- 長期療養支援や地域連携に協働して取り組んでいる看護師とMSWを対象とした『協働シンポジウム』開催。薬害被害者の支援として首都圏、地方拠点病院の看護師とMSWの協働の課題を探る。
- 中核拠点病院の看護師、MSWを中心とした会議・研修会による人材育成。

新型コロナウイルスは五類感染症への見直し方針ではあるが、オンライン形式の利点を生かしつつ、対面開催を行うなどハイブリッド形式での開催を検討する。

E．結論

HIV感染症患者の長期療養体制構築に向けて、首都圏のエイズ治療拠点病院と同様に、地方においても看護師はHIVチームのハブとして、MSWは地域連携のハブとして機能していた。両者の協働をテーマとしたシンポジウムは、首都圏においても、地方においても関心が高く、また参加した満足度も非常に高い結果となった。今後も協働をテーマとした研修や地域連携の課題検討のシンポジウムを継続することにより、HIV感染症患者の地域療養環境の整備が求められる。

F．健康危険情報

なし

G．研究発表

1．論文発表

なし

2．学会発表

1) 葛田衣重、池田和子、古谷佳苗、小嶋道子、羽柴知恵子、三嶋一輝、横幕能行. HIV感染症患者の療養支援に関するNsとMSWの協働について～第1回NsとMSWの協働シンポジウムのアンケート結果から～. 第36回日本エイズ学会学術集会・総会.2022年. 2022.11.18～11.20.

H．知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

1．特許取得

なし

2．実用新案登録

なし

3．その他

なし